

時間を建築する

Chronos...時計を刻む定量的に連続する客観的な「流れる時」
 Kairos...ある出来事が起きる単一的で主観的な「訪れる時」

こどもの頃の記憶それは断片的で雑然とした記憶である。楽しかったこと、怖かったこと、驚いたこと、様々な記憶が単一的な「時」として記憶されている。それがいつの記憶であるのか、何をしていた時の記憶であるのか、他の情報は一切覚えていないのにその一瞬の「時」だけが記憶されている。前後の出来事との関係性、その時の状況、他の情報を記憶していなくてもその一瞬の「時」だけが記憶しているのは、形成されている「時間」というものへの概念が違うからだ。

こどもの頃に過ごした時間は過去から未来へ定量的に連続的に「流れる時」ではなく、ある出来事が起きる時の主観的で単一的な「訪れる時」である。

主観的な「訪れる時」を過ごすことも大切ではあるが、こどもは自分たちが、自分たちが過ごす「訪れる時」が「流れる時」の中に存在していることを知覚する必要である。

こども園という空間で「訪れる時」を生きるこどもに「流れる時」を建築する。



00 Prologue : 時間概念の拡張

大人はChronosの世界に生きていてこどもはKairosの世界に生きている'こんな言葉がある。幼児にとって時間とはKairosである。幼児が体感する時間は主観的なものでまだChronosという概念を獲得していない。

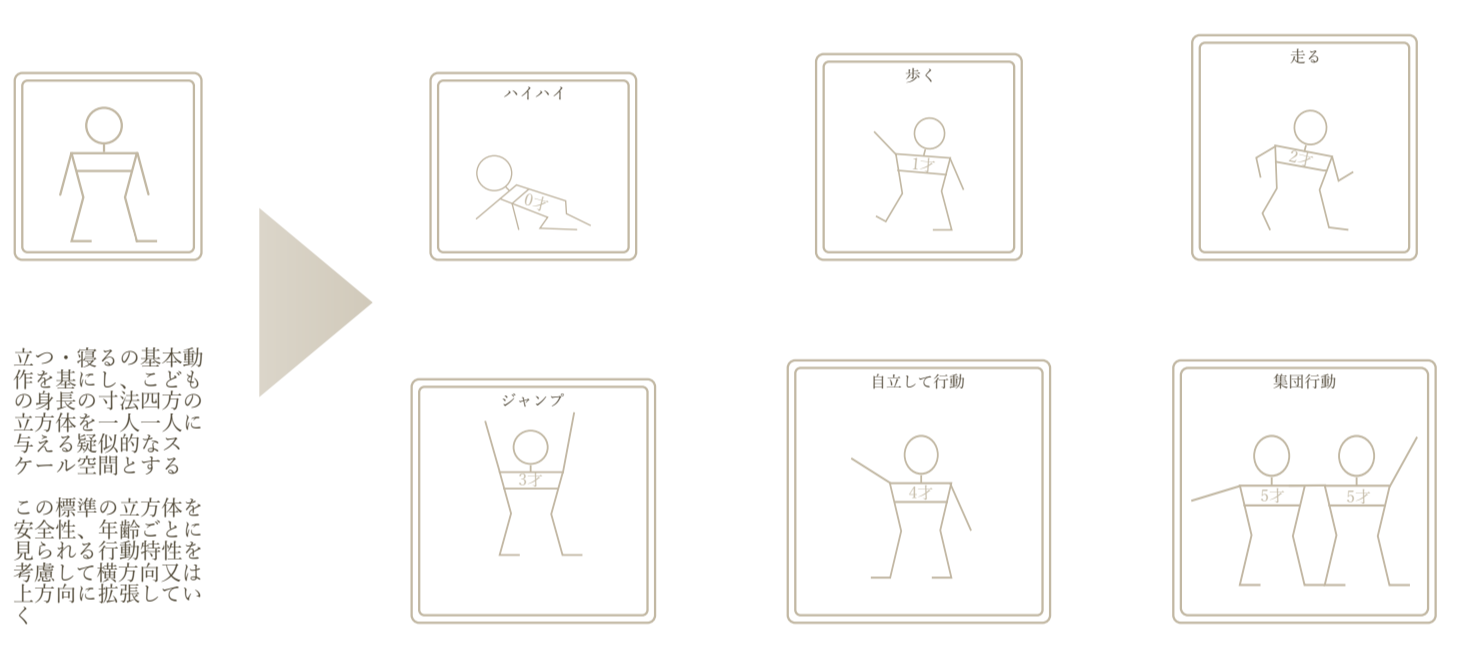
Kairosの世界に生きているこどもたちを無理にChronosの世界へ連れ出すのではなく、時間の概念を数から空間や環境の変化へと拡張し、日々を過ごす中で自然とChronosの世界つまり「流れる時」を体感することも園を提案する。



01 Chrono-Topos(時空間) 一つの空間に複数の視点が織り込まれる空間

こども園とはこどもたちが最初の社会を築く場である。物を知り人を知り自分を知る、その過程で成長がある。他人、他人の存在する空間に視点を織り込むこと、また自分に、自分というものが存在する空間に織り込まれている視点を知覚することが必要である。

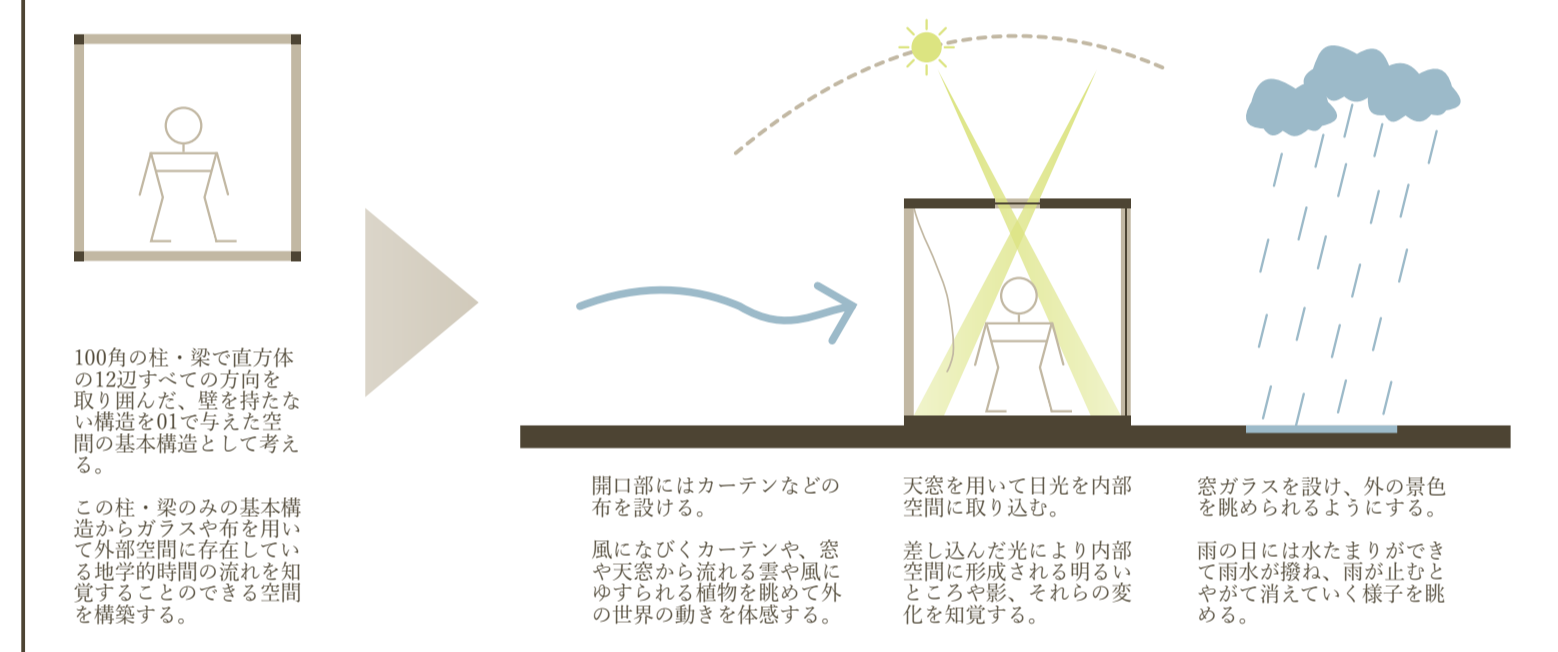
周囲からの多数の織り込まれる視点を受け入れる空間としてこども一人一人に固有の空間を与える。こどもの年齢ごとに身体寸法、安全面、行動特性から一人当たりの疑似的なスケール空間を導く。



02 Chrono-Lag(時差) 地学的時間と建築的時間の時差を埋める空間

こどもたちが日々過ごす空間はそれを取り巻く外部空間に対してどのようにあるべきか。日々話して、遊んで、学んで、寝ている空間の外部には、日が昇り日が沈み、風が吹き草木が揺れ、時には雨が降り雨が落ちていく。そこにはこどもたちが過ごす時間とは異なった時間が存在している。この時差を埋めるために地学的時間を体感する建築空間を設計する。

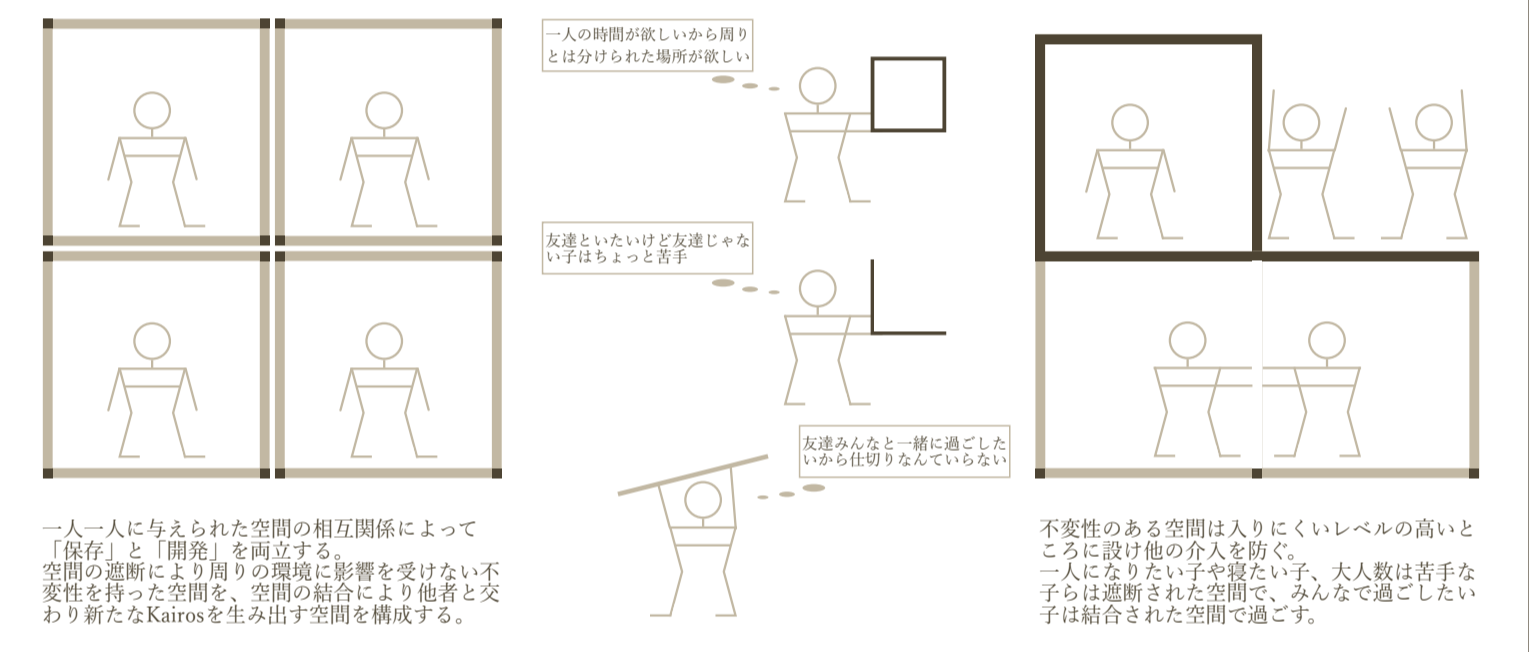
時空間に地学的視点も織り込む、外部空間の中で自分というものがどう存在しているかを知覚する。



03 Chrono-Chaos(混沌) 保存と開発が両立する建築

「保存」とは「流れる時」つまりChronosの中で不変的であること。「開発」とはある出来事をもたらす「訪れる時」つまりKairosを生み出すこと。

日々成長していくこどもたちが過ごす建築で不変性を持つこと、Kairosの世界で生きているこどもたちに建築的アプローチでKairosを生み出すこと。一つ一つの時空間の構成により「保存」と「開発」が両立する建築を形成する。



04 Chrono-Variation(変化) 季節や時間に応じて変化する動的な建築

こどもを取り巻く自然環境は変化している。自然が豊かに生い茂る季節、雨が降る季節、暑い季節、寒い季節。また、こどもたちが過ごす環境も変化している。朝早く来る子もいれば、夕方遅くまでいる子もいる。一日の中で園にいるこどもの数も常に一定ではない。

こどもたちに環境の変化を知覚させるためには建築空間もこれらの環境の変化に対して動的に変化していく空間である必要がある。

